

## 編集後記

二〇一五年度もあつという間に駆け抜けて行ったような気がする。それほどまでにこの一年が充実していたということなのであろう。

二〇一五年度のメイン・イヴェントは何といつても一〇月一〇日に開催された「八重山諸島の芸能に触れる―琉球大学八重山芸能研究会による公演―」であった。本学キリスト教文化研究所の主催、本学音楽学会、国際文化学会、同生涯学習センターの共催で開催された本公演は、八重山諸島の島々の暮らしの中で歌い、踊り継がれてきた豊かな芸能を味わうというものであつた。御用意いただいたパンフレットには、演目となっている八重山諸島の歌について、歌詞の全文が掲載されるだけでなくその意味と由来が、舞踊については演目の写真も含めて、顧問である山里純一氏（琉球大学教授）の手によって丁寧に解説されていて、このパンフレット一冊で八重山芸能の魅力を味わい、基本的な知識を得られるというものに仕上がっている。

公演は、休憩をはさんでの二部構成で、座開きとしての「斉唱 赤馬節・かたみ節」に始まり、「舞踊 目出度節」「独唱 ちんだら節 安里屋節」「舞踊 月夜浜節」「民俗芸能 ダートゥーダー」「浜遊び」、そして「ファイナーレ」で「弥勒節・やらよう節」が歌われて大歓声のうちに終演となった。

本公演の目玉は何といつても「民俗芸能 ダートゥーダー」であろう。八重山諸島の小浜島にのみ残るこの芸能は、今や島外では演じられることが禁止されているもので、今回、本学でこれが演じられるのは山里純一氏の御尽力によるところであり、八重山の半世紀にわたる活動の裏打ちがあることによる。ここに記して、山里先生にはあらためて深く感謝申し上げる。満員の観客がこの「ダートゥーダー」にくぎ付けになったことは記すまでもないことである。公演も大成功であった。懇親会では気持ちよく祝杯を挙げる事ができた。

続く十一月十九日には、早坂優子氏（多賀城市教育委員会事務局文化財課調査普及係）による公開研究会が「都市部の墓から見る現代沖繩―『霊園型墓地』とその利用者―」と題して行われた。報告は、近年、沖繩県那覇市、沖繩市周辺といった本島中南部の都市部に増えている「霊園型墓地」を取り上げ、その普及の過程や利用のされ方に着目し、そこから見える現代沖繩の墓と社会の変化についてのものであった。沖繩の墓と言えば「亀甲墓」が有名であるが、都市化が進む地域で進行している墓の在り方の変化や「墓地行政」といった内容は新鮮なものであり、興味深い報告であった。

今年度も生涯学習講座「知りたいっちゃ沖繩 行きたいっちゃ沖繩」の受講生とともに沖繩ツアーを実施した（一二月二〇―二三日）。二〇一五年は、第二尚氏王統の始祖である尚円王の生誕六〇〇年ということで、その出身地である伊是名島を訪ねた。「逆田」をはじめ、『球陽』に記されている尚円ゆか

りの地を訪ね、また島に残る「伊是名玉御殿」を訪ねた。「伊是名玉御殿」については、なぜそれがそこにそのように配置されているのかという「そもそも論」を、同行した犬飼公之氏（本学名誉教授）が、沖縄の他界観という点から、首里にある「玉陵」や浦添にある「浦添ようどれ」と対比しながら読み解いていかれたことが強く印象に残っている。沖縄研究の深さを感じた次第である。

また、今回のツアーでは沖縄県立博物館・美術館の安里進館長から館内の所蔵品について懇切丁寧に御案内いただいた。「目からうろこ」のお話もあり、参加者一同、あらためて琉球・沖縄史の魅力に触れることができた。安里館長にはこの場を借りて心より感謝申し上げたい。

安里先生を囲んでの懇親会では、旧知の山里純一氏や宮城幸子氏、早坂優子氏も参加され、旧交を温めることができた。楽しい思い出である。

さて、二〇一六年度はどのような年にしようか。今から楽しみである。

（文責 今林直樹）